

たんぽぽプロジェクト感想

2026年3月25日

学籍番号 1MD24607M

氏名 轟木あい

1 プロジェクトに参加しての感想

たんぽぽプロジェクトに参加しての一番の衝撃は、福島の実況が想像と全く異なっていたことです。震災からもう15年も経つので、さすがに阪神淡路大震災の後の関西周辺のように、復興しているだろうと考えていました。しかし、福島県沿岸部には地震と津波だけではなく原子力発電所の事故の影響がありました。被害が甚大だった双葉町では現在避難先から帰ってきた人と移住してきた人が200名ほど生活しており、人が住んでいる家、空き家、既に更地にされた土地が混在している異様ともいえる光景が広がっていました。

また、震災に遭われた方への関わり方について考えさせられる場面もありました。日本は地震大国ですから、何も知らないままだと軽い気持ちで話題に出してしまうこともあるかもしれません。記憶の伝承のためにも、被災者の話はアンタッチャブルにすべきではないものですが、案内して下さった方や同年代の参加者など見た目では分からなくても忘れられない記憶を抱える方は多くいます。相手の背景を知らないまま無意識に踏み込んでしまうこともあり得るため、慎重に関わる必要があると感じました。

帰路にて、東京の駅で福島の観光PRポスターを見かけました。たんぽぽプロジェクトに出会わないままだったら目にも留めることはなかったでしょう。今まで見えていなかった福島という存在に気付けるようになった瞬間でした。

2 同級生や後輩等、他の学生に伝えたいこと・福島に対して自分達で出来るようなこと

今まで九州で暮らしてきた私たちにとって、福島の実況はどのようなものなのでしょうか。社会の授業や毎年3月のニュースで大きな地震があったことを知る程度で、それ以上に興味を持たなければ、今の福島の実況を知る機会ほとんどありません。現に、この福島でのプロジェクトに応募したと母に話したときは「行って大丈夫なのか」と心配されました。この母の態度こそが、震災発生から15年が経過した今、特に遠く離れた九州では今の福島は何も知られていないことを示していると感じました。参加者の中には、自分も福島に対して偏見を持った状態でプロジェクトに参加したと話してくれた人もいました。今はまだ何も知らなくても構いません。私自身もいわゆるガクチカがほしいと思ったことが参加のきっかけでした。このたんぽぽプロジェクトは診療放射線技師養成大学（専攻）に通う者しか参加できない限られた機会です。個人でできることなど、現実的に考えるととても限られたことしかありませんが、放射線を学ぶ者として、その限られたことの一つがたんぽぽプロジェクトに参加して現状を知ることはないかと思えます。

3 大学での講義や実習に取り入れると良いと思ったこと

各回の講義やフィールドワークの後は、ブレインストーミング形式のワークショップがありました。それぞれの講義を受けて学んだこと、疑問に思ったこと、自分たちにもできることや周りの人に伝えたいことのそれぞれの項目で考えを出し合うものです。参加者の学生は非常に意欲的で、きちんと考えながら講義を聴きフィールドワークで活動しなければ自分だけ意見が出せなくなってしまいます。そのため、自然と緊張感が生まれ、普段より高い集中力を持って取り組むことができました。たんぼぼプロジェクトは学びの先で参加者が何を考えたかが重視されるのに対し、普段の講義は知識の伝授を主としているので、同じ形式を取り入れることは難しいですが、学生たちで何か話し合って知識を吐き出したり意見を交換したりする時間があるといいと思いました。

たんぽぽプロジェクト レポート

川原陽

私はこのたんぽぽプロジェクトに参加し、多くの貴重な経験と知識を得ることができた。東日本大震災および福島第一原発事故から15年が経過し、どこかですでに終わった出来事のように感じ、正直なところ関心が薄れていた部分があった。しかし、本プロジェクトを通して、地震発生から津波、原発事故に至るまでの経緯を学び、さらに当時の写真や資料、特に被害の大きかった浜通りの現在の様子を実際に見ることで、震災は決して過去の出来事ではなく、今もなお続いている問題であることを実感した。基礎的な知識を学んだ上で現地を訪れたことで理解が深まり、新たな知識も非常に吸収しやすかったと感じている。また、フィールドワークや講義の後に行われたブレインストーミングでは、学んだ内容を整理し、疑問を解消することができ、短期間で得られる多くの情報を理解する上で大きな助けとなった。

特に印象に残っているのは、震災当時に医療従事者として尽力された先生の話である。正しい情報を伝えても、不安や恐怖から受け入れてもらえず、怒鳴られるような状況の中でも被災者に寄り添い続けた姿勢に深く感銘を受けた。この経験から、災害時において医療従事者が果たすべき役割や責任、そして相手の立場に立って伝えることの重要性について深く考えさせられた。「科学が受け入れられるのは信頼の後である」という言葉は特に印象に残っている。同時に、将来医療に携わる者としての自覚も芽生えたように思う。

この経験を踏まえ、同級生や後輩など他の学生に伝えたいのは、震災や原発事故を風化させてはならないということである。時間の経過とともに関心が薄れがちではあるが、現地では今も復興が続いており、多くの課題が残されている。また、原発事故以降、放射線に対して危険なイメージが先行し、誤った認識が広まったことも大きな問題である。将来、放射線に関わる専門職を目指す私たちは、正しい知識を身につけるだけでなく、それを分かりやすく伝える責任がある。そして、自分たち自身もかつては放射線について十分な知識を持たない立場であったことを忘れず、相手の理解度や不安に寄り添った説明を行う姿勢が重要であると感じた。

さらに、福島に対して自分たちにできることとして、正しい情報を発信し続けることが挙げられる。放射線に関する知識を正確に理解し、周囲の人々に伝えることで、風評被害の軽減につながると考える。また、現地で学んだことや感じたことを共有することで、震災や復興に対する関心を高めることも重要である。加えて、福島の現状を正しく理解した上で日常生活の中で選択を行うことも、復興支援の一つの形であるといえる。私の地元にも原発があり、稼働に関するニュースやデモの様子を目にする機会は少なくない。自ら周囲に原発について考える機会を提供することも、私たちに求められる役割の一つであると考えている。

本プロジェクトを通して、大学での講義や実習においても改善できる点があると感じた。

特に、基礎知識の学習と現地での体験を組み合わせることで理解がより深まり、学習効果が高まると考える。また、ブレインストーミングのように学んだ内容を整理し、他者と意見交換を行う機会を設けることも、主体的な学びを促進する上で有効である。さらに、実際に現場を経験した医療従事者の話を聞く機会を増やすことで、教科書だけでは得られない現実的な視点や倫理観を学ぶことができ、将来の職業意識の形成にも大きく寄与すると感じた。

三日間という短い期間であったが、それを感じさせないほど多くの学びや気づき、経験を得ることができた。このような貴重な機会を与えてくださったことに、心から感謝申し上げます。

たんぽぽプロジェクトに参加して

1MD24610R 千綿 優香

私はたんぽぽプロジェクトに参加し、福島の現状を知るとともに、他学生とのワークショップを重ねる中で、福島の今後の復興について深く考える機会を得た。私は福島から遠い地域に住んでおり、東日本大震災についての基礎的な知識すらほとんど持たないまま、このプロジェクトに参加した。しかし、福島で実際に施設を訪れ、震災当時からほとんど手が加えられていない建物や環境を目の当たりにしたことで、想像をはるかに超える苦しみがそこにあったことを強く実感した。目に映る一つひとつの光景から、当時多くの人が苦しみ、その影響が今なお続いていることが伝わってきて、震災を決して過去の出来事として扱ってはならないと強く感じた。

また、たんぽぽプロジェクトでは、震災当時に福島で医療関係の仕事に従事していた方や、DMATとして災害医療に貢献した方、さらに復興のために住民から厳しい言葉を浴びせられながらも現場に立ち続けた方など、多くの貴重な話を伺った。それらの話を通して自分たちにできることは何か、何を外に伝えるべきか、参加者同士で何度も話し合った。このような経験は誰もが簡単に得られるものではないため、実際に話を聞いて何度も思索を重ねた私たちが代弁者となり、学びや気づきを外へ伝えていく必要があると感じた。

福島の復興が思うように進んでいない背景には、かつての私自身のように、知らないがゆえの無関心が影響している部分もあるのではないだろうか。現地の状況を知る機会がなければ、福島で起きていることを自分とは遠い場所の出来事として捉えてしまい、関心を持ち続けることは難しい。私自身、福島県を実際に訪れ、現地の様子を自分の目で見て、当事者の生の声を聴いたことで、その経験がメディアを通して知る情報とは比べものにならないほど大きな衝撃として心に残り、同時に無関心ではいられなくなった。だからこそ、福島に足を運ぶことが関心を生み、復興について考える第一歩になるのではないかと感じている。出来事の実事や当事者の思い、葛藤、そして今も続く課題を伝えていくことはもちろんのこと、福島にぜひ一度訪れてほしいという思いを、私は強く伝えたい。

私たちにできることとして、レポートや発表、SNSなどを通じて自らの体験や考えを発信し続けることで、震災や福島に対する関心の風化を防ぐことが挙げられる。その際、根拠のない先入観を正し、医療的・社会的視点から現状を伝えることが重要であると感じた。また、オンライン等を活用して、震災当時や現在も現場で活動する医療従事者や支援者の生の声に触れる機会を設けることで、将来医療に携わる立場としての実感を伴った学びにつながると考える。大学の講義や実習においても、福島の問題を過去の出来事として扱うのではなく、現在も続く課題として様々なテーマと結びつけ、学ぶ機会を取り入れていくといいのではないかと思った。たんぽぽプロジェクトを通して得た学びや気づきを多くの学生に伝え、将来の医療従事者として社会課題に向き合い、行動できる力につなげていくことが、たんぽぽプロジェクトに参加させていただいた私の義務だと考えている。

たんぽぽプロジェクト

1MD24620E 西原あかり

私は、たんぽぽプロジェクトに参加してたくさんの知識を得たと同時に、まだまだ知識不足だなと感じる部分も残りました。明らかに、このプロジェクトに参加する前と比べて原発や原発事故後の現状などを知ることができたと思います。ですが、その知識を正しく皆に伝えられる自信はまだありません。実際、家族にも説明しようとしたが先生方のように答えることはできませんでした。しかし、まずは積極的に動いて現地に足を運び、現状を知ることがとても大事なことだと改めて感じました。最初から完璧に知っている人はいませんし、先生方もまずは現地を訪れて知ることからスタートしたのだと思います。そのため、私はこのたんぽぽプロジェクトを起点に、よりたくさんの知識を身に付け立派な伝道師になれるように努力していきたいと思います。

皆さんに伝えたいこととして、まずは「動く」ことが大事だと思います。今、九大生にはたんぽぽプロジェクトに参加する権利があります。この権利を頂いているからにはぜひ参加してほしいです。たんぽぽプロジェクトでは、原発に関して学ぶことに加えて様々な大学の生徒や先生方との交流がありました。特に懇親会では、たくさんの人の話を聞けたり仲良くなれたりする機会があります。私は、先生方に人生相談を聞いていただいて前よりも視野が大きく広がりました。また、他の大学の生徒とも仲良くなり交流関係も大きくなりました。このように、このプロジェクトをきっかけに知識も交流も人生への考え方も大きく変化したと思います。皆さんにもぜひ、このような機会を通して大きく成長してほしいです。